

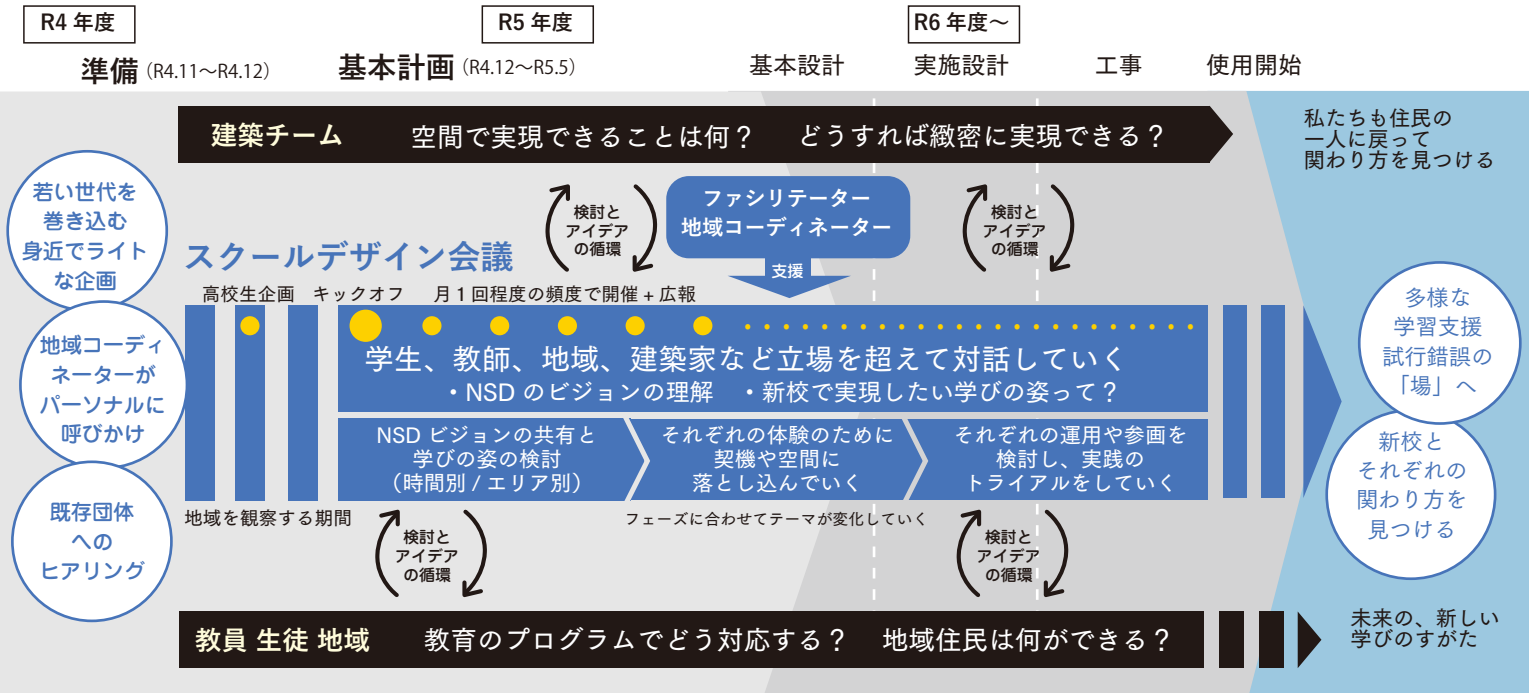
スクールデザイン会議の発足（市民ワークショップ）

●デザイン会議の目的

伊那新校の計画を進めるために地域がどのような学校を望むのかワークショップを計画段階から完成後まで継続的にいきます。

- ・オープンで誰もが参加できる場とする（建築チーム、施主チームも参加者）
- ・NSD のビジョンについて地域に理解をはかる
- ・新校で実現したい学びの姿を明確にしていく
- ・学びの姿を具体、明確にしていくことで、建築に緻密に反映することができる

デザイン会議の位置付けとフロー



●デザイン会議の進め方

1. 毎回 NSD のビジョンを示す
2. その都度テーマ、チームを設定
3. 多くの方が参加しやすい時間や曜日を都度設定
4. 参加を促したい方にパーソナルに呼びかけ
5. 多くの方に届く広報の方法を提案
6. 会議に参加できない生徒には探究の授業も利用
7. 参加者からファシリテーターや地域コーディネーターへの変化も支援

地域コーディネーターの役割

会議で誰と何を話すべきなのか、地域団体・コミュニティは多種多様で外部から来た人には見分ける事ができません。上伊那に住み、活動しているからこそ人物の個性まで理解した上でのセッティングが可能です。また広報のアイデアでより多くの方にデザイン会議の進捗を伝え、参加を促し続けます。

ファシリテーターの役割

ファシリテーターは「コミュニティデザイン」の手法により、新校建設のプロセスにおいて、形だけの住民参加ではなく、本質的な参加のプロセスを導入し、地域性を考慮しながら、真に大切な住民意見を取り入れていきます。そのプロセスにおいて、当事者意識の醸成、さらには新校建設後のアクションにつながる流れを生み出していきます。

●大事にする「視点・思い」 高校生や若者が参加したくなる、真に聴く場であること

1. スクールデザイン会議自体が、探究的・対話的で、深い「学び」があること
2. 地域の多様なヒトが交流する「場」として機能すること
3. 持続性のある環境をコモンとして整え、その意義を共有すること（場や学びへの理解、未来への共有、情報化）
4. グローバルな感覚から地域・地元を捉えることで、地域に暮らす私たちが多様なアイデンティティを持つ視座を得ること
5. 多様な関わり方を受け入れ、互いに認めあうこと（継続的な関わり、ポイントでの参加）。

●デザイン会議での議論や結果が上伊那の地域性

教育をめぐる議論は、上伊那では「はじめにこどもありき」の理念に立ち返り、現在の教育について一つの正解や意見を束ねるのではなく、新校で実現したい学びの姿を通して、多くの人が議論し、自分なりの関わり方や、視座を得ながら、課題を抱えて、また普段の生活に戻っていく。普段の生活の中から、次のデザイン会議で話したい事を見つける。そんな思考を繰り返すことで、建築家は新校で目指すべき空間のありようや機能を明確に掴み取り、教員は準備すべき授業の在り方や誰とどう協力していけば実現できるのか、地域として、街にどんな場所があれば良いのか、生徒とどう関わるのが良いのか、多くの学びがあるだろう。また、上伊那の地域はその議論が始まる準備はできている。

探究学習に対する、ファシリテーター（長野県在住現役大学生）の思い

昨今の進学校は大学進学に向けた学習に多くの時間を割かなければならない状況で、すごく忙しい。対して、大学生は探究分野に取り組み易い。その要因は、自分で考えることができるという時間や空間、思考の余白の有無があげられる。大学は AO 入試方式などに比重を置き始めており、その移行期である今の学生たちは、探究学習のような実践的な学びと、従来の勉強とどちらも取り組まなければならない。より多くの生徒たちが探究に対して面白いという状態になるまで考えられる、「時間や空間、思考のゆとり」がもっと必要であろう。自らの高校時代、探究学習に十分に向き合えなかった反省があるからだ。